

反障害通信

14. 7. 30

46号

うそつき、ごまかし、無責任のアベ政治がなぜまかり通るのか？

同じようなことを書き続けているのですが、改めてもう一度整理してみます。

政治家は信頼されることが第一だと思うのですが、うそとごまかしと無責任の安倍首相が政治家であり続け、首相でいられるのかどうしても分かりません。そのことを押さえ直す前に、まず、数々のうそとごまかしと無責任を列記してみます。

原発をめぐるうそ

原発の再稼働問題で、「原発の世界一の規制基準」という安倍首相の発言で、泉田新潟県知事から「うそつき」と断言されています(これはテレビ朝日の「ニュースステーション」(7/25)でフィンランドの原発を例に出して「周回遅れの安全基準」と、「大うそ」が暴露されていました)。そもそも、もう少し前に、オリンピック誘致で、みずから乗り込んだオリンピック委員会の場で、フクシマ原発事故を「完全にコントロールしている」という大うそを世界に発信して、笑いものになるのみならず、政治家としての一番肝心な信用を喪失するという悲喜劇を演じています。

原発に関しては、そもそも安全神話のウソがありました。インターネットのユーチューブというサイトで、事故が起きるずっと以前に原発反対派のひとと「原子カムラ」の東大教授が公開討論していた記録が事故後に流さされていました。「原子カムラの東大論法」として有名になりました。まさに詭弁なのですが、詭弁という枠を超えた大うそが明らかになっています。その東大論法は、周りにサクラを配し、確信的にウソを言い(もしウソという自覚がなかったら、論理的な思考ができないとして教員をくびになるような論理です)、その反論をサクラから大声で非難させると、それが真実的にまかり通るという話です。

安倍首相のさまざまな分野での発言は、まさにこの「東大論法」に比することとして批判されることです。そして、国会などでの答弁を聞いていると、まさに論点をきちんとかみあわせて答弁しようという意志がないらしく、論点をずらし、自分のいいたいことを勝手に言っているのです。ひととちゃんと対話する意思のないひとが政治をやっているという悲喜劇です。

原発の再稼働は一番肝心な事故が起きた時にどうなるのかというところでの反省のない、地域住民、とりわけ「避難弱者」のことを考えない、電力会社の利益や経済成長の幻想のなかでの、ひとのことよりもお金が大切という政治です。しかも、規制委員会(これも「規制」ではなくて、実質「再稼働推進」という名称のうそ)の委員を都合の良いようにすげ替え(その委員も電力会社からお金をもらっているひとを選んでいるというペテン)、責任の押し付け合い、たらい回しのなかでやろうとしているのです。

ウソと約束の反故から始まった安倍政権—選挙制度改革を巡るうそと約束違反

そもそも第二次安倍政権が発足したのは、当時の民主党の野田首相と安倍自民党の総裁との党首討論で、選挙制度の抜本的改革をする意志があるなら、衆議院を解散するというところでお互いの確約の中で、解散選挙に入り、安倍政権が発足したのです。その党首討論は、テレビのニュースで流れ、多くのひとの前で約束したこの確約を反古にしたのです。まさにウソから始まった政権なのです。

歴史認識をめぐるうそとごまかし

数々の歴史認識をめぐるアベロンリがあります。一番の出発点は、侵略と戦争に関することです。そもそも歴史的事実をねじ曲げようとして意味不明の話をしていたのですが、「侵略の定義は学者によってさまざまある。」ということを始めました。さまざまあるのなら、それをひとつひとつ吟味し、政治家としてどれを自分として正しい歴史認識としてとりあげるのかが問題になるはずですが。彼は自分の歴史認識で政治をすれば隣国から批判を受けるとして第一次内閣の時は封印し、それを第二次では前に出そうとしたのですが、やはり衝突さち、「歴史認識は歴史学者にまかせる」という論理で、自分の吟味が批判にさらされることを回避しようとしています。実は任せていません。任せるとするのは大うそです。そもそも歴史認識のないひとに政治などできません。ちゃんと自分の歴史認識で動いています。そこが彼の核心的なことなのです。安倍首相の歴史認識なるものは、そのさまざまにある歴史認識で、およそ非論理的でちゃんと議論にさらされたら、大笑いされる歴史認識にすぎません。

自分の責任を回避し、自分に近いおよそ非論理的な考えをする「歴史家」や「科学者」や行政官を周りに集め、しかもちゃんと自分のやっていることの責任をとろうとしない「科学者」たちなのですが、責任ということをつらい回しにする無責任体制を作り上げています。

彼の政治は、自分の考えを議論の場にさらして、みんなに検討してもらい、それを国民的合意として形成していくという、「民主主義のルール」といわれることを無視して、強引に押しつけていくという手法です。小学生の生徒会以下の「民主主義」です。「民主主義とは何か」を子どもに教えるのなら、永田町の政治は、まさに反面教師にしなければなりません。

一番の核心は戦争に負けたのがいけなかったのだ、そもそも負ける戦争をしたのがいけなかったのだという反省でしかない歴史認識だったのです。他の国に侵略したことや戦争そのものの反省はしていません。およそ政治に一番必要な責任という観念がなかったのです。それだから、戦争の反省にたった憲法や、戦後体制を精算しようとするのです。

今、その大嘘は中国批判で現れています。

「力による領土・領海の変更は許されない」といううそとごまかしと無責任

今、中国が東南アジアでも覇権的な行動をしている事に対して、「力による領土・領海の変更」は許されないと繰り返し発言しています。歴史ということを知っているひとは思わ

ず笑ってしまうことです。

わたしたちは生きている過程で他者と仲良くしていくにはどうすればいいかを学びます
安倍首相を先頭にした右翼的保守政治家というのは、どうも政治以前の基本的な人間関係ということが分かっていないようなのです。他者を批判する前に、自分もおなじことをしていないか、きちんと押さえた上で、その反省の上に立ってきちんと行動をし、その反省をなしきった上で、他者を批判するという基本的姿勢が欠落しています。他人・他国のひとの思いなどはどうでもいいとエゴイストの集団のようです。相手の立場になって考えようとしません。そんなことをしていると外交がなりたちません。だから隣国との衝突・摩擦を繰り返します。そのようなひとに政治を語る資格はありません。

安倍首相は「侵略の定義はいろいろある」といっていましたが、「力による領土・領海の変更」がまさに侵略の定義の見本ではないでしょうか？ 日本はまさに過去にこれをしたのです。そして、少なくとも形式的にはその反省の上で、サンフランシスコ条約を締結し、平和憲法を発足したのです。そして、さまざまに過去の反省を歴代の首相や官房長官談話などで行っていました。それをないことにしようとしている、むしろ靖国参拝にみられるように過去の反省を反故にしたのが安倍首相と取り巻きなのです。「我が国は対話を求めて開いている」とか、「未来志向」とかいう話をしていますが、過去の反省をなきことにした未来は恐ろしき未来です。過去の反省がないところで、「開いている」等というのはおおうそです。ひとを殴っておいて、握手を求めるようなことです。そこに友人・外交関係が成り立つのでしょうか？ そもそも、外交で解決するのではなく、力で決着が付くとして、戦争が出来る国にしようとしているのです。

国民の信を得たといううそ

橋下大阪市長もそうですが、選挙で自分は選ばれたのだから、何でもやっていいんだというような錯覚を起こしている政治家がいるのですが、選挙で選ばれたというのは白紙委任を得たわけではありません。「議会制民主主義」の世界では、もう一方で選挙で選ばれた議会の信も得ながら政治をすすめなければなりません。もし、何でもやれるというのなら、そしてそれをやれば、ファシズムのクーデターのようなことです。そんな「民主主義」のイロハもしらないような政治家がいるのはまさに驚きなのです。それに政治家は次の選挙のことを考えて行動します。だから、世論の動向を汲んで行動するのです。今回の安倍首相の「集団的自衛権」をめぐる「民主主義」の根幹を揺るがす暴挙は、まさにこぼれ、次の選挙で政権交代の受け皿がなくなって、議会制民主主義のシステムが機能不全に陥っていた中での暴挙なのです。

もうひとつ書き置きますが、そもそも選挙で多くの議席を得たというのは、ひとつひとつの政策が信任された訳ではないのです。まして、原発再稼働で端的にとらえられる公約違反とごまかしをしているのですから、これも大うそです。

次に述べる集団的自衛権の問題で、安倍首相のとりまきの「論客」が、「自衛隊員の死者が出る」とい批判に、それは、「そのときの政権を選んだ国民の責任だ」と、本音をぼろりと出しました。うそとごまかしで政治をしておいて、その責任—無責任を弾劾しないで、何が「国民の責任」なのか、まさに無責任の極みです。

「集団的自衛権」を巡るうそとごまかし

「集団的自衛権」で戦争をしないと、抑止力になるとか、言っています。

今のこの世界が、まるで抑止力が効いて、戦争がない世界のようなことを言っています。軍隊があることが戦争の抑止力になるのでしょうか？

過去にアメリカから、戦争に軍隊を出せという圧力がかかっている、それを「集団的自衛権は認められないから」と部分的にはね返していた歴史をどうとらえているのでしょうか？

そもそも過去の歴史ということをもっと押さえないのがアベ政治なのです。

公明党は「集団的自衛権を巡る与党協議が歯止めになった」とか言っていますが、そもそも軍事に関することはなし崩し的にやってきたという歴史の積み重ねがあります。今回は「集団的自衛権は行使できない」という文言を消すだけで良かったのです。それが歯止めになっていたのですから、とにかくそれを消す、後はなし崩しでやる、そしてそもそも元々出していた憲法改正に向けて少しずつなし崩し的にやっていく、そのなし崩し的にやっていくことが自民党的ごまかしの政治手法だったのです。

「積極的平和主義」といううそとごまかし

アベ外交や集団的自衛権での動きでその下になっているのは、「積極的平和主義」という言葉です。こんなうそとごまかしで塗り固められたことばはありません。

昔戦国時代に、戦乱のない世界を作るのだと、武力による平定を行おうとした（これもそんな意識があったかどうか疑問ですが）論理です。こんな論理がまかり通るなら、ヒトラーの第三帝国も、世界支配による「平和な世界」の創出となる積極的平和主義だし、日本ファシズムの大東亜共栄圏の建設も積極的平和主義になります。

過去の歴史のとらえ返しのない大うそなのです。もっともアベ政治を突き動かす本音は、この過去の亡霊、「大東亜共栄圏」建設なのではないのでしょうか？ このことを覆い隠しごまかすことばが、この「積極的平和主義」なのです。

アベ政治のこのうそは、原発とともに武器の輸出に踏み込み、しかも、営業部長的にセールスに邁進していることに端的に表れています。かつて、武器輸出は「死の商人」として弾劾されていました。第一次アベ政権のとき「美しい国・ニッポン」がキャッチフレーズでした。そもそも、郷里をくにと言うとき美しいことは追求されるのかもしれませんが、そもそも国家などというものが、政治というものが「美しい」などというのは存在矛盾です。で、「死の商人」が、首相自ら「死の商人」の仕事をする国が、「美しい」などと言えるわけがないのです。公害の輸出の反省や事故の検証もちゃんとしないで原発の輸出をすることが「美しい」と言えるのでしょうか。

さてここで、なぜ、こんなうそとごまかしと無責任がまかり通っているのかをとらえ返します。ここで、キーワードになるのかアベノミクスといううそとごまかしと無責任の論理です。

アベノミックスと呼ばれる「経済成長戦略」のうそ

アベノミックスというのは「経済成長戦略」です。しかも、国際競争力で打ち勝つことを追い求める「経済成長戦略」なのです。みんなで幸せになろうという経済成長ではありません。＜帝国＞的グローバリゼーションは、未だ組み込まれていない所を組み込むことによって経済成長を求めるのですが、グローバリゼーションが世界を覆う中で、経済成長の伸びしろをなくしていくのです。だから、収奪の強化によるわずかな成長しか見込めなくなっていくます。成長などというのは幻想になっています。経済成長を追い求めることによって、みんなの生活がアップしていくというのは幻想なのです。だから経済成長戦略により、国際競争に打ち勝ち、国民全体の生活がアップしていくというのはうそなのです。そもそもみんなで国境を越えて幸せな世界を作ろうという発想がなぜ起きないのでしょうか？ 他国のひとの生活を破壊し、自分のことだけを考えて他者の収奪から幸せを求めることは、結局自国においても、格差の拡大をもたらします。それにそもそも経済成長といって、どのような内容の経済成長なのでしょう？ たとえば自然エネルギーの開発による成長の伸びしろは少しはあるでしょう？ そこを求めないで、電力会社の目先の利益追求で再稼働を追求し、伸びしろの可能性を摘んでいるのです。今、現在、アベ首相は財界の営業部長よろしく諸外国に営業活動をしています、一体何をうりこんでいるのでしょうか？ 武器の共同開発での売り込み、原発の輸出などが報道されています。これが経済成長の中身です。武器はスペンディング(浪費)経済といわれ、経済成長にはつながりません。軍事に金を使えば、経済が疲弊していきます。

今日、アベ政治は大企業—金持ちのための政治をしているということが露呈してきています。それでも、金持ちや大企業のための政治をすることで、そのおこぼれとして、国民の生活がよくなるのでしょうか？ そういう幻想を振りまいていますが、現実にはますます格差が広がり生きがたさが広がって行って、幻想でしかない、おおうそであるということが明らかになってきています。

そして、アベノミックスはそもそも「経済成長戦略」などでなく、マネーロンダリングで株価操作しているだけの、幻想的「経済成長政策」にすぎないことが明らかになってきているのではないのでしょうか？ 幻想はながもちしません。そのうち崩壊する、その前にアベ政治は、一応戦争の反省から始まった戦後体制を精算し、右翼的政治の遂行をなしとげようとしているのでしょうか？ 排外主義・差別主義を煽り・拡大し、まさにファシズム的体制を作ろうとしているのです。

さて、アベ政治のうそつき、ごまかし、無責任ぶりがあきらかになってきているのに、それでもなぜ一定の支持を維持しているのでしょうか？

それは、ひとつには、うそつき、ごまかし、無責任の政治の中で、政治不信と無関心を生み出していることがあります(無関心ということには、日々の生活に追われる中で、将来のことなど考えられないとして、目先の利害しかとらえられないという問題もあります)。そこで、投票率をさげる中で、目先の利益誘導で組織票をいかし、選挙制度を民意が反映されないように改悪し、政権を維持するという構図です。

そして、差別されるものが差別を転化するひとたちを見だし、そこで差別の構造を維持していくことに加担していくという構図があります。そういう差別主義的構造・体制を

作り上げようとしているのです。そして、仮想敵を作り、危機をあおり、その国をマスコミを総動員して排外主義的に批判し、愛国主義教育とあいまって、安保政策を遂行していくという政治です。

もうひとつ、書いておきたいことがあります。それは「集団的自衛権」の問題で、「自衛隊員の犠牲者がでる」というところでの批判の問題です。わたしはこのような批判の仕方はあまり有効ではないと思います。「それは自衛隊員の話で、自分には関係ない」と思っているひが多々いるからです。むしろ、今の自衛隊員は、「戦争はしない軍隊だから資格をとるために入隊した」というようなひが多々いて、現実には戦争をするようになると退役する、人が集まらないとして、徴兵制がしかれるというようなことを押さえておく必要があります。勿論今安倍政権は「徴兵制など考えていない」としているのですが、ごまかしにおいて、なし崩しの政治としてやっていくパターンを指摘できます。

それにそもそも、現代の戦争は、「他の国で起きていて、自分の国にいる限り、軍人以外は死傷する恐れはない」という戦争形態ではなくなっています。力の政治、軍事的行動を起こしていくと、そのリアクションとしてテロリズムがおきてくることがあります。アメリカで、9.11 が起きたときに「無差別テロ」という批判がありましたが、あれは無差別テロではありません。アメリカ国民に、アメリカ政府がやっていることに責任をとらせるテロだったのです。誤解を生みそうなので一言書いておきますが、わたしは、ひとを殺すということは責任をとらせることにはならないと思います。死によって責任から解放されるだけです。だから、安倍首相にはむしろ(そんなものがあればの話ですが)「不老不死の薬」を与えて、自分のやった政治が何を引き起こしたのかをちゃんと見届けさせる必要があると思っています。このままで行くと、安倍首相の名は、人類に対する罪を起こした者として歴史に名を残し、批判され続けることです。

ですが、そもそも、そんなことを言っているときではないのです。犠牲者が出てから、批判する前に、わたしたちがやるべきことがあります。安倍首相を引きずり下ろし、うそつき、ごまかし、無責任の安倍政治に終止符を打たねばなりません。

このままでいけばとんでもない事態に陥っていきます。何ができるか、ひとりひとりが自分ができることを考え行動をおこして行きましょうー

(み)

読書メモ

今回は「介護」関係軸にした読書でした。障害問題もまだ整理されていない面があるのですが、障害関係での議論が「高齢者の介護」に届いていないことも感じています。そもそも主流の「障害者運動」が介護保険制度ができるときに、既得権が侵されると、高齢者の問題を切り離れた責任があります。わたし自身も動かなかった責任があります。遅れさせながら、今からでも少しずつ考えていきたいと思っています。

・イヴァン・イリッチ／金子嗣郎訳『脱病院化社会—医療の限界』晶文社 1979

この著者との出会いは、エコロジカル・フェミニズム（エコ・フェミ）の思想的支えにもなっていた『ジェンダー』という本からです。一時期フェミニズム関係本を読んでいたときに、いろんな流れを押さえる作業の中で、エコ・フェミの基本文献として読んだのですが、フェミニズム間の論争で、エコ・フェミは「性ということを実自然的なものとしてとらえてしまっている」という批判で、決着が付けられた流れとして押さえました。そして、わたしの関心からすれば、まさにそれを物象化として押さえ、批判してきました。しかし、エコロジーということ自体へのわたしの希求からすると、即、退けるということでもなく、近代文明批判としての「脱」の思想には、ポスト構造主義への評価と共に、それなりに共鳴することとしても有り続けています。

この本は、「医原病」ということをキーワードにした過剰医療への批判の本です。過剰医療にとどまらず、医療ということ自体への疑問・否定のようなことも出ていて、「受苦的存在としての人間」論のようなところで、「受苦的に生きる」というところでの医療の否定というようなニュアンスで展開しているようなのです。この本が出された頃はまさに過剰医療が問題になっていた頃です。現在の医療・福祉の切り捨て・切り詰め時代に、「延命処置」の不開始や停止問題が「自己決定の尊重」ということに（そこにおける「自己」とは何か）からんで、「脱病院化」ということがどのように作用していくのかのおそれも感じています。

イリッチ（他の本では「イリイッチ」という表記もあります）は、哲学的なところから、とりわけ近代哲学の批判、とりわけデカルト批判というところで、論攻を進めていることもあります。この本を読みながら、わたしがリンクしたのは、廣松さんの「青年マルクス論」です。マルクスは青年ヘーゲル派として出発し、フェイルバッハの「受苦的存在論」やブルーノー・バウアーの「自己意識」などへの対話・批判から自らの哲学を定立させた、というところで、まさに物象化という概念（「社会的な関係を自然的な関係として取り違えた」）を生み出したということとして廣松さんはマルクスを押さえています。わたし自身は青年ヘーゲル派の本自体を押さえていないのですが、まさにイリッチは、「物象化された自然」での、論展開に陥っているのではないかと改めて感じていました。マルクスの物象化論をさらに新たに展開した廣松物象化論の観点から、改めて、イリッチの自然概念のとらえ返しが必要になるのではと思います。

わたしの主題である反障害論においても、「障害」としての異化ということが、イリッチがここで取り上げている「病気」としての異化につながっていて、そういう意味ではこの本は興味ふかい本です。

改めて、ノート作りから学習し直したいのですが、そこまでやりきれません。

とりあえず、メモを書き出しておきます。

パーソン論的論攻 P100

デカルトの心身二分と痛み P117

論攻からの「精神病」者の切り捨て P123

パリコミューンの病院解体方針？ P122-124

ルソー P124

デュポス「健康という幻想」 P124

コペルニクス P126

デカルト P126

医療の政治性 P132

ベイコン P147

プロメテウスの神話 P207

ガリレオの望遠鏡の比喩 P207

ネメシスを見ようとしな

著者の規範 P213

「純粋な人間の生活」

産業的生産と自律的生産の均衡 P124

自律的行動の回復（自己覚醒）

・・・受苦的存在のペシズムからオプティズムへの反転

←資本主義的生産では不可能・・・唯物史観

医原病の定義 P216

逆に拡大 P216

自己覚醒・・・ブルーノー・バウアーの「自己意識」

自律 P220

著者の医療の位置づけまとめ P220

この本の中でもたびたび引用されているフーコーの『臨床医学の誕生』との共振があるようです。買い求めました。ちょっと間に急ぎの読書を挟んで、またコメントします。

たわしの読書メモ・・・ブログ 253

・すぎむらなおみ『養護教諭の社会学—学校文化・ジェンダー・同化』名古屋大学出版会 2014

差別の問題で中広い観点をもっている著者の三冊目の本です。著者自身が養護教諭で、その原点に関するライフワーク的論攷、養護教諭に関わる差別の問題をラジカルにとらえた文に、こころゆさぶられました。

構成は、序章 養護教諭という存在を研究する／第1章 「同化」という視点／第2章 職制運動時代の学校看護婦たち—「身分の確立」をめざして／第3章 1960年代の養護教諭—アイデンティティをもとめて／第4章 現代の養護教諭—同化をこえて／終章 再び「自己エスノクラフィー」としての総括—養護教諭の再構築にむけてとなっています。

「養護教諭」の出発点は学校看護婦だったのですが、そのことを医療の世界から教育の世界へ入ってきた移民的存在として、その中で受ける様々な差別に対する、差別をなくす

ということの集約点として、教導や教諭資格を獲得していく運動と差別ということ、民族問題の「同化」という概念からとらえ返そうとしています。さて、同化ということの内容として、「同一化／同質化／同体化／同格化する」と著者は書いています。わたし自身も差別形態論で、下位分類として「抹殺／隔離／排除／抑圧／融和／同化」という概念を出していました。この本を読み刺激されて、『通信』の『『反障害論』への補説的断章』で、同化ということを変更してとらえ返して、差別形態論をもう少し整理してみたいと思っています。

さて、4章、最初は、わたしは養護教諭が現在抱えている問題として読んでいて、差別を問題にしている全体的構成の中で、この章で登場してくる養護教諭の評価的な文がどう位置づけられるのか分からなかったのですが、著者は養護教諭の養成と指導という観点に踏み込んでいて、それも含んだ論攷で出てきていること、養護教諭のあり方論的な内容も含んだ展開になっているようなのです。現実には生徒と接するところで、あり方論が必要になっていくのだということでの論攷として読み取れました。

この本は、きっとマイナーな（その接点のないひとの意識にあまりにくい）専門書の本としてとらえられてしまうのですが（差別の問題をそれなりに巾広くとらえようとしているわたしも、著者との出会いがなかったら、手にすることはなかったのですが）、そもそも「マイナーな」とか、マイノリティとされることにこそ、その問題を深くとらえ返していくと、その中の普遍的な（ユニバーサルな）問題がうかびあがってくるのだと思っています。決して養護教諭の存在自体がマイノリティの問題ではなくて、現行の受験・学歴偏重の教育のなかで、そして社会が金儲けと労働を軸にすえて動いている中で、マイノリティの存在になっているのだと思います。「障害者運動」が示した「障害者のすみやすい社会は、みんながすみやすい社会である」（「国際障害年の行動計画」から出てきていることば）ということからすれば、そして山田洋次監督の「学校」という映画のなかで、「学校とは、ひとの幸せとは何かを学ぶところ」という台詞からすると、まさに今、養護教諭が担っている、そしてこれから担うこととして出されていく（出して欲しい）課題自体が、マイノリティ的なことではなくて、まさにユニバーサルなこと、存在なのだ、この本を読み終えての感想です。

（読み終えての論考）

同化の内容に従属化と融和が入り込んでいる

融和・従属的下位的組み込み— 差異をそのままにした下位への組み込み

同化という幻想

同化ということと対等化の混同が社会的に広がっている。ほとんどは対等化ではなく、下位への組み込み、そしてひとつの集団の独自文化の抹消という抑圧・強制として行われる。

・六車由美『驚きの介護民俗学』医学書院 2012

「介護民俗学」というのは、この著者の造語です。

著者は大学で民俗学をやっていた教員・研究者です。大学を辞めて施設で介護の仕事を始め、そこで、民俗学の聞き書きの経験を活かして、「利用者さん」に聞き書きをするという話です。それが「利用者さん」たちに生き甲斐をもたらす—エンパワーメントするという事ももっているという話です。

「介護の世界」で、認知症ではことばによる会話がむずかしいということがあり、非言語的コミュニケーションの大切さという教えがあるのですが、著者は民俗学者として聞き書きを可能にして実践していています。介護でも、傾聴とか回想法とかいう似通った姿勢とか方法のようなことがあるのですが、著者がやっている介護民俗学の聞き書きとの違いは、介護民俗学には、驚き、心躍るといふことがあると書いています。

そして、介護の世界でも一応職員と利用者の対等な関係といふのは理想的にあるのですが、現実的には「お世話になっている」といふ意識にとらわれ、下的な意識を持つてしまうのです(なぜ、そうなるのかは後述)。介護民俗学の聞き書きにおいては古老への聞き書きと同じように教えを請うといふようなところでの聞き書きであり、「利用者さん」を元気づける、生き甲斐をもたらすといふようなことを生み出していきます。

現実的にはいろいろな問題が起き、そして職員が足りない中で聞き書きの時間がとれないとかもあつたりするのですが、それでもなんとかクリヤーしながら著者の介護民俗学の聞き書きの実践は続けられます。

さて、民俗学者の経験から、「認知症者」の同じ問いの繰り返しを(これは「自閉症」のひとつの「こだわり行動」も含んだ同じ行動の繰り返しにも通じています)、民俗学的なとらえかえしとして、祭礼における繰り返しといふところからとらえ返しています。これはわたしは自然の中で生きる民が発展などよりも日々の同じ繰り返しこそを大切にするといふことに通じのではないかと思ふのです。

この著者の介護でのとらえ方はラジカルで、「介護予防」といふ言葉への違和を表明しています。介護をうけることを否定的にとらえると老いといふことも否定的にとらえてしまうといふことで、「介護予防でなくて、むしろ介護準備」といふ事を提起しています。そして、その内容として自分史を書くことを進めているのですが、自分で書くよりも、自分で気づかないこともあることとし、「聞き書き」といふ手法も取り入れることを提起しています。

そして、自分も含めてむしろ「利用者さん」たちから自分たちが生きる力をもらっているんだといふことを書いています。

もうひとつ、今わたしが関心をもっている介護労苦論への批判として、このひとも介護のプロ的なところに至つていて、「寝たきりの利用者のオムツ交換をするのだが、オムツを開けたときに大量の排便があつたりすると、いかにこの便を素早く、しかも丁寧に拭き取り、利用者の臀部をきれいにしオムツを交換するか、と俄然張り切つたりするのである。そして、それがうまくいったときの満足感といつたらたまらない。」P213 といふようなことを書いています。学の世界から介護の世界に飛び込んだひとですが、介護のプロ意識に

至り付いていることに感じ入りっていました。(これは『介助現場の社会学』の中での介助労苦論的な論攷へのわたしの批判にリンクしています。)

さて、後述するとしていたことを書き置きます。介護を受けるものが下になるということ、わたしはそもそも高齢者が昔は古老として敬われていたことから、今は労働と金儲けの論理で社会が進んでいく中で起きていることではないかと思いのです。ですから、そもそもそこから介護ということ的位置づけ直さないと、聞き書きでの対等な関係やむしろ敬うという関係が一時的な関係になってしまうのではないのでしょうか？ 命と生活を軸にしたところで関係総体を変えていかないと、介護制度の理念を振り回しても、「利用者さん」の意識も介護者の意識も変わって行かないのではと思います。

たわしの読書メモ・・ブログ 255

・渡邊琢『介助者たちは、どう生きていくのか—障害者の地域自立生活と介助という営み』
生活書院 2011

「障害者」介助に関わる俯瞰図とも言える書です。

介助の緒類系や自立生活センターの色々な流れのようなことを紹介してくれていて、貴重な資料です。

そして、結論を出すのではなく、紹介に徹しています。二面性というようなことを書いていて、対立していることが表裏的に存在するというようなこととして書いていて、すごく興味深いのですが、著者のそれなりの見解のようなことがそこにちりばめられてはいるのですが、介助者の立場もあってあえていろいろな観点ということを提示するだけにとどめているのかも知れません。とにかく、資料的に優れた本、特に介助に関わるひとの必読書として紹介されていく本になると思います。

さて、著者も運動というところでのコミュニティ的なところでの共感性を問題にしていますが、それをどうも労働者としての介助者としてとらえているようで、そこで労働者性を出していくと対立してしまうと著者は危惧の念を出しています。

そしてかつて労働者が「障害者」と対立してきた歴史を著者は書いています。

どうもそのあたりは違うのではないかと思うのです。たとえば施設の労働者として対立しているのではなくて、あくまで施設の職員として対立しているのではないかと思うのです。労働者という自覚があれば、そもそも資本や経営者として対立しているところで、むしろ労働者側から連帯を求めていくことが本筋です。現在の労働者は労使協調的にとりこまれ、労働者意識をなくしているからこそ、対立の図式がうまれてしまうのではないのでしょうか？

わたしは福祉の枠を固定化する中でむしろパイの分け前論的なところで、対立の図式が作られて行くのだとも押さえています。

更に論考を進めると、介助というところでは主体は「障害者」というところがあって、介助者の労働者的な立場が前面に出るのは少し違うのではないかと思うのです。そもそも介助者がなぜ介助の仕事についていくのか、そこに介助者の被差別者の問題があるのではないかと思うのです。だから、むしろ介助者は労働者の立場だけで連帯するのではなくて、

自らのいろいろな被差別者の立場での対等な連帯ではないかと思うのです。著者は反貧困の運動をしています。そこでのこの社会で、「弱者」という立場におかれた「障害者」との連帯ではないでしょうか？

この著のなかでも、まだまだ介助の不十分性が書かれていますが、それは単に時間的に介助保障をふやしていくということではなく、むしろ「障害者」と介助者の関係のそのもののあり方の問題ではないかと思うのです。著者はどうも有償介助の流れはどうしようもないこととして押さえているようなのですが、わたしはむしろベーシックインカムというような議論として出てきているところから、お金から離れた共同性のあり方として、そこから主体を「障害者」に据えなおした新しい関係が結べていくのではという思いも持っています。どうなのでしょう？

たわしの読書メモ・・ブログ 256

・川越敏司／川島聡／星加良司『障害学のリハビリテーション—障害の社会モデルその射程と限界』生活書院 2013

「障害の社会モデル」に関する議論は様々に積み重ねられて来ています。ですが、まだきちんと整理された論攷に出会っていません。この本も結局混乱的状况に嵌っていています。

全体的におさえれば、どうも一体何を議論しているのか読めないでいたのですが、どうも「社会モデル」で何が問題になっているのかという根本的な議論がなされないで、責任論とか規範論に話がずれていっていると思います。そもそも近代知の地平が問題になっているとわたしは押さえているのですが、因果論的責任論に話が流れていっているのです。

まず、「社会モデル」をわたしなりにきちんと押さえ直しておきます。そもそも医学モデルという言い方は、「社会モデル」側から出てきたのであって、「社会モデル」以前にあったのではないと思います。この本で、医学やリハビリテーションを否定するものではない、という論攷がみられます。確かに全否定することではないのですが、そもそも医学やリハビリテーションの名で、「障害」impairment をなくす、軽くするということを強いられてきたのです。それは単に強いられたということだけでなく、自己決定(この自己決定については後述)という名の下に「障害」に対する否定的社会的意識にとりこまれてきたのです。それへの批判・自己批判の中で、「社会モデル」が登場してきたのです。そのあたりのことが、「社会モデル」の障害規定ではあいまいにしてしまった書き落としがあるのです。それは差別を障壁ということばでしかとらえず(差別形態論でいえば、排除型の差別しか問題にせず)、(同化などの)抑圧型の差別を抜け落としているのです。だからわたしは「社会モデル」を紹介するときにその展開形として、「障害とは、社会が「障害者」と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」と追加記入していました。そういう観点があれば、医学やリハビリテーションが抑圧的に機能してきた面をとらえるなら、そもそもこの本のような表題がなぜ付いて行くのかという疑問がでてくるはずですが。

もうひとつの「社会モデル」の批判ですが、いろいろ批判の書き方がされているのですが、わたしは、誰からかどこからかの引用なのですが、「impairment」を括弧にくくってしま

った」という批判が妥当ではないかと思うのです。今、障害学でそれなりに意識に上がっている議論で最先端を行っているのは脱構築派の議論です。この本では後藤さんのコメントにそのことは現れています。わたしなりにその構築主義というとらえ方を使って説明すれば、「障害の社会モデル」は **disability** の脱構築はしたけれど、**impairment** の脱構築まで遡及しなかったということです。実は、川島さんがこの本の中で **impairment** の構築主義ということを書いています (P108)。ですが、自分では実際にそのような内容の論攷はしていません。それどころか、障害 **disability** は「障壁と **impairment** の相互作用などから生じる」というようなことを言い出しています。**impairment** を脱構築する対象としてとらえたら、その脱構築する対象を相互作用のファクターにはもってくることはありえないのではないのでしょうか？ 実はこの本の中で、星加さんの基調文にコメントした菊地夏野さんが **impairment** と **disability** の関係を **sex** と **gender** の関係に類比させ (これはディスカッションの中で飯野さんも言っています)、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』という本の紹介をしています。わたしも同じような論攷をし、繰り返しこの本にふれています。この提起は、他の著者やディスカッションの参加者の中で(同じフェミニズムの立場から参加している飯野由里子さんにはあるようなのですが)、他のひとには届いていません。そもそも「社会モデル」批判をしている人たちの中でフェミニズム障害学を名乗るひとたちがいるのですが、わたしは「フェミニズムの僭称」と批判しています。フェミニズムにも色んな流れがあります。このひとたちはバトラーの存在をしらないのだろうかと思に思っています。この脱構築派(一般には構築主義という言い方をされていますが、わたしは構築されていることを批判的に指摘しているのに「構築主義」という言い方はミステイクではないかと思に思ひ、脱構築派という言い方をしています)の議論は少なくとも、イギリスでは取り上げられています。まだきちんと展開するには至っていないのですが。この本の中で後藤さんがとりあげている「障害者」の発言「今、君は「何もすることがない」って言っていたけど、どうして何かをしなきゃいけないわけ？何かをしなきゃいけないというのは健常者の発想でしょ。」はまさに脱構築的端緒だと言い得ます。このような話は、日本においては青い芝のひとたちの発言としていくつも出ていました。「労働は悪だ」とか「介助を受ける時、腰を上げるのも労働だ」とか、それをきちんと展開していくとまさに脱構築に至ることです。そして、現在のには、そのあたりは、立岩さんがやっている論攷の中にもみてとれます。かれの「できるにこしたことがないのか」という問いかけや「なぜ、ひとりでやることにとられるのか」という様な提起の中で進めている論攷は、まさにこの **impairment** の脱構築的内容になっています (かれは結局、運動的に届かないところで倫理主義に収束してしまっているのですが)。

わたしは反差別論の中でとりわけフェミニズムの中で出てきている脱構築派を押さえておかねばならないと、デリダやフーコーを少しかじりました。わたしもきちんと読み切れていませんが、わたしは固定観念から脱するというだけでは有効性があっても、現実的にどういう社会を作っていくのかの議論はここから出てこないのではないかと思っています。さらにこの流れでは近代思想・近代哲学批判のポイントをどこにおくのかも、とらえられないでいます。

さて、この本の中でも、飯野さんがディスカッションの中で「・・・これまでの西洋思想・

近代思想を通して、社会的にエイブルであることへの社会的強制のパターンというものを、もっとラジカルに提起していく必要があるだろうと思います。」 P172 という提起をしています。

そもそも「障害者が障害をもっている」というとらえ方、そしてそれを社会という言葉で反転させた考え方も、実体一属性、そして因果論的な近代知の地平から出てきていることで、そのこと自体を批判していく必要があると思っています。近代的個我の論理から出てくる「自己」という概念自体のとらえ返しが必要になっています。

わたしはマルクス—廣松渉の流れでの近代哲学批判にさおさし、そこから出ている物象化批判、実体主義批判の中で、障害関係論という新たな地平を切り開こうとしています。新たなと書きましたが、日本において、すでに「障害とは関係の問題である」という論攷が出ていました。きちんと認識論・思想的なところから展開していかない中で、歴史の中で埋もれてしまったことを展開し直す作業なのです。

アメリカ障害学が障壁の除去を優先させているという論理ですが、その障壁が能力主義まで問題にしていなかったころでは、結局能力のある—できるひとを差別してはならないというところで障壁を問題にしていることにすぎなくなります。それが ADA 法の考え方であり、そこで批判されてきたのではないのでしょうか。そもそも権利条約の翻訳のなかで「障害をもつ人」ということばをつかっていることがどうして障壁の方を強調していると言い得るのでしょうか？ そして、結局できないところで差別されるひとにとっては、impairment が優先されてしまうのです。ポジティブ・アクションやアフーマティブアクションは「エリート障害者」の社会参加には意味あるとしても、それが逆に分断をもたらし、総体的に差別を解消するには至りません。運動のリーダーをつくり出すという意味はあるとしてもです。諸刃の剣なのです。菊地さんは、「能力主義」から問題にしようと提起しています。そりあたりは「能力を個人がもっているものとしてとらえない」という『いのちの平等論』の竹内さんの議論に通じることがあります。ただし、竹内さんはそれも含めて人権論を作り直そうとしているのですが、そもそも人権という概念自体が脱構築すべき対象だし、物象化とし批判されることです。川島さんは法学者ですから、法というのは近代思想に裏付けられた近代国家の法でしかありえず、そもそも人権とは何かというところまで、問い返しをしたら、法学自体がなりたたなくなるので、そこでの議論をさけるので、結局近代思想まで問題にしく障害学と法学のダブルスタンダードに陥ってしまいます。

さて、わたしは障害学との対話を立岩さんの『私的所有論』から始めました。そこで、『反障害原論』というところの基調的文を出しています。そこで結局わたしの提起が届きません。それはそもそも今の社会の枠組みで、倫理で、差別を軽くしようという立岩さんには、届かないのですが、逆にマルクスのなことはもう死んだ思想というとらえ方があるようなのです。マルクス派が差別の問題をとらえてこれなかったということとマルクス主義の名による血に塗られた運動の負の歴史的総括の問題をなしていく必要があります。反障害—反差別論からマルクス派の構築をはからないかぎり、この提起は届かないのではとも思っています。また、そもそもマルクスにふれていくものは学者として飯が食えなくなっているという現状もあるのでしょうか。わたしは学者ではないので、そのようなしぼりには無縁なのですが。

それらのことも含めて、どのように届く論攷を進めていくのかをあらためて考え、「障害者運動」のための理論を紡ぎ出していきたいと思っています。

ゆらぎの提起は単にそのような考え方もできるという話、そこから、むしろなぜ逆のことがスタンダードとして展開されてきたのかが唯物史観的とらえ返しが必要なのだと改めて、わたし自身の論攷の必要が再度確認できたのですが、そんなこといってもわたしの論が全然届いていかないのです。どうすればいいか、改めて考えようと思っています。

追記1 「社会モデル」は、そして脱構築派の提起は、結局ゆらぎを与える提起にとどまっています。ゆらぎの提起は単にそのような考え方もできるという話で収束してしまいます。そこから、むしろなぜ逆のことがスタンダードとして展開されてきたのかが唯物史観的とらえ返しが必要なのだと思います。そこでの、わたし自身の論攷の必要が再度確認できたのですが、そんなこといってもわたしの論が全然届いていかないのです。どうすればいいか、改めて考えようと思っています。

追記2 障害問題をジェンダー概念における脱構築からとらえ返す作業において、この本の中で、セックス—ジェンダーとインペアメント—ディスアビリティという対比がなされているのですが、わたしはもうひとつ延ばして、セックス—ジェンダー—セクシュアリティとインペアメント—ディスアビリティ—ハンディキャップという対比から考えた方がいいと思います。そもそも ICIDH の批判につながるものなのですが、セクシュアリティというところからセックス概念の脱構築に遡及させていくことがあったように、社会的不利—差別ということを考える中でインペアメントの脱構築へ遡及させていく対比が必要なのだと思っています。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 46 号」アップ(14/7/30)
- ◆HPの容量がオーバーしてきて、「反障害通信」の旧い号を消去し始めました。バックナンバーの欲しい方にはメールなどでお送りします。
- ◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。ホームページでは掲示板はやっていません。とりあえずリアルなやりとりを「対話を求めて」というブログでやりたいと「通信」に載せている原稿を転載し発信していました。そのブログ（アクセスはこの「通信」の最後に）の「コメント」に批判・意見をもらい対話を求めていました。ところが、意味不明の応答が 8000 以上有り、とりあえずコメント欄を使えなくしています。様子を見て、復活したいと思っていますが、とりあえず、メールで意見を下さい（アドレスはこの「通信」の最後に記してあります）。よろしければ（確認をもらえれば）、ホームページやこの「通信」に転載し、応答をしていきたいと思っています。インターネットをされていない方は携帯 **090-9857-3431** に連絡ください。

介護の学習の中で

母を看取って、介助の反省のようなことが浮かんできていて、きちんと反省をしておきたいと、介護の講習に通っていました。介助論をとおした反障害論の深化という目的もあってのことです。

で、感じていることをいくつか書き置きます。

まず、母の介助が本格化する前に、介助の基本的なことを勉強しておけば良かったということ。中学のときに保健体育とか技術家庭のようなことがありました。実学といわれるようなことで、今になって、結構役に立つ知識がいろいろあり、生きるという上で大切なことで、このようなことをきちんと勉強しておくことではないかと思うのです。介助のようなことも、そのようなカリキュラムの中に入れるか、選択として成人になる前後に習得する車の免許のように習得しておく知識や技術の類ではないかと思うのです。介助だけでなく、生きるための知識としても。また、確実に母の介助が迫っていたときに勉強するなりしておくということも必要だったと、思います。わたしとしても、それなりに介護につながることは、障害関係から波及する読書の中で、それなりの知識は吸収していたのですが、自分の問題意識からの学習でしかありませんでした。基本的な介護のテキストとして学ぶこと、この社会の現在的な介護に関わる意識一学を知っておくことが、大切なのだと今改めて感じています。

もうひとつ、勉強していて、結構理念的に整理されていると思いました。新しい知識がたくさんあり、こういう理念的な学習を是非くぐっておく必要があると、その意義を感じていました。ただ、理念と現実の遊離のようなことがあり、それがどこから来ているかの分析が必要なのだと思います。また、「障害者運動」サイドからのとらえ返しが高齢者介護にまだきちんと届いていないという思いもあります。学んだ場が高齢者介護を軸にした教室だったということがあり（むしろ、そういうところで学んでおきたいと選択したこともあったのですが）、「障害者」の講師がいないのです。

たとえば、介護のテキスト（介護の制度）で、キーワードになっている「尊厳」ということばがあります。「自律」や「自立」ということば、「自己決定」ということばとともにもっと深化してとらえる必要があるのではと思うのです。

先日脳死・臓器移植に反対するひとたちの集会に参加してきました。その中で、会場からの「どうしてそんなことばを使うのか」という質問に答えて、講演者から「ことばというのは分けるためにある（何らかの分ける必要があるからことばが生まれるという趣旨ですが）」という応答があったのです。このことは、ことばを使う限り差別から逃れられないという考えにつながって行くので、危ないなと感じていました。わたしは（わたしが思想的に多大な影響をうけた）廣松さんの「命名判断は価値判断を懐胎してなされる」という内容のテーゼを想起していました。わたしは反差別論をやっている過程で、価値付帯的でない命名判断、すなわち、上下に異化するのではない、水平に異化する命名判断的異化がありえるとしていました。話をもどし「尊厳」ということばでいえば、まさに「尊厳」ということばは価値付帯的な命名判断として異化しているのですが、（これも前述の学習会で別

の講演者から出ていたことばですが)「かけがえのない(存在)」ということばには価値付帯的ではないと感じます。だから、反差別運動的には「尊厳」という言葉を使うことによって、かえって障害差別やエイジズムを生み出してしまふ。反差別という観点をもっている立場からは、そういう「差別を生産・再生産していくことばをちゃんとした批判なしに使うのはやめようよ」となると思います。

「自立」や「自己決定」にしても同じです。「自立」ということばには身辺自立ということにつながり、そこへ繰り返し引き戻すことがあることばで、それを「こころの自律」とか、「自己決定」として置き換えても、そこで「知的障害者」へのパーソン論的差別につながっていくことです。だから、そのことを押さえた上で、繰り返し注意喚起して使っていくことはあるとしても、不用意な使い方はできないと提起していくことが必要なのだと思います。

さて、思いがけない理論的な収穫として、介護の世界で、ICFが援助のあり方のツールとして使われていることを知りました。ICFが出てきたとき、こんなもの「障害者運動」的な立場から使えないとしていたのですが、そもそもICFを翻訳しているテキスト—日本語訳の序の中で、「医療・福祉の援助のツールとして使える」というような文言が出ていたのです。ですが、そもそもICIDHで、障害概念が混乱しているとして、「障害の社会モデル」からの批判も受けて、新しい障害概念を生みだそうとしてICIDH-2として議論されていたその目的はどこへ行ったのでしょうか。障害学で(たとえば読書メモ「川越敏司/川島聡/星加良司『障害学のリハビリテーション—障害の社会モデルその射程と限界』生活書院2013」の中で川島さんが)このICFへの、「ファクターを併記しているだけ」という批判を紹介した上で、それでも使えるとしているのですが、そもそもファクターとしていることの相互関係こそが問題になっているのです。そのことのとらえ返しがなければ、現実のそのひとの抱えている問題を列記していくだけでは、現実的にどう「援助」するかということでは何らかの役に立つことはあったとしても、そのことが「個人的に」解決できることではないかぎり、「障害者運動」的には使えません。その問題がいかなる問題であり、どう社会的に解決していくかが問題なのです。そういう意味で、とても使いようのない図式だといえるのではないかと思うのです。

さて、母の介助の反省として、わたしが介護の講習を受けて一番学んだことは、本人の気持ちを受けとめる必要と言うことです。なんでもいってくださいとていったん受けとめる姿勢の必要ということです。そもそも母の考えは、この社会の差別的考えをとりくんでいて、反差別の立場に立つわたしからすると受け入れがたい考えだったのです。そこでそもそもそれをいちいち指摘していたら、母を否定するようなことになってしまうと、ときには指摘しつつも基本的に顔をしかめるなどの反応すまそうとしていました。しかし、反差別の運動家としてのスイッチが入って反応してしまうこともありました。それに加えて、わたしは、母の考え方を聞きながら、「そんな考えは、自分の首を絞めることになるよ」とか「そんな考えていたら、身体が動かなくなっていくともっとしんどくなるよ」という思いから、母の考えを批判していたこともありましたが、ですが、そもそもひとの考え方を変えることのむずかしさがあり、母の考えのおかしさを批判することは、母にとっては、自分の存在を否定されるようなこととしてあり、自分の意志を否定される抑圧としての差

別としてあつたのです。このあたり、運動から政治というところで動いていたわたしは、そもそも政治が意志の押し付け合いでの勝敗の世界であり、そこに身を置いたところで、そういう押し付け合いをそもそも否定する立場でありながら、政治を否定する政治を生きる中で、そこに生きていたことで、大局的にはむしろ社会的意識に対するレジスタンス的な不可抗力的なこととしてやっつけてしまっていたのかも知れません。母にとっては抑圧以外の何ものでもなかったのですが。

もうひとつ、母の老いということをとらえきれないこととしてあつたのです。母は頼り切って生きていた父を送ってから、独り暮らしをしていて、そこでの生活のなかでの恐れというようなことと、老いということでの死へつながる恐れがあり、そこからかたくななさを作りあげていっていたのではと、介助が本格化する中で考え始めていました。そのあたりの老いの心理というようなことをとらえられない中で、わたしは今ひとつそういう母の心理をとらえられない中で、そのような心理からくるかたくなさを否定的に反応してしまっていたのです。で、それなりにとらえ返す中で、最期は怒らなくなれたのですが。

そのあたりは、老いや自分がのたれ死にする恐怖の様なことに対して、その恐怖の様なことを解いていくことが必要だったのだと思います。たとえば、「わたしがちゃんと看取るよ、わたしは介助はちっとも苦痛ではないよ、むしろ楽しいんだよ」という声かけをしていく事だったのですが、そもそも母と衝突していたときには、わたし自身がまだ介助に対する不安を抱えていたし、どうなっていくのかの見通しがたっていなかったのです。

そもそもわたしの生き方の問題として、うそはつかない誠実さを信条にしている、ことばのもつうそっぽしさということでの、ことばで伝えることの苦手さがあつたのです。そんな中で、それなりに「介助は苦にならないよ」ということを身をもって示そうとしていました。意識的に決して母の前で疲れた顔を見せないとか、否定的な態度は示さないと心がけていたのですが、現実的な疲労とか睡眠不足でどこまできちんとやれていたのかの自信もありません。誠実さは示しつつ、もっとちゃんとことば化していくことが必要だったと、これも悔い・反省として抱き続けています。

色んな思いがあります。親子だから、言いたいことをいうとか、逆にむしろ親子だから言わなくても伝わるとかあります。それから過去の色んな思いを引きずりつつの介助です。だから、むしろ他人介助がよい面もあるのかもしれない。

とにかく、もっと色んな声かけをしておけばという、今になっての思いを引きずっています。そんな思いを、これから介助していくひとに少しでも伝えておきたい、そして介助論を通した、ひととひとのあり方の論攷として、文にしていきます。

なぜ、わたしは文を書くのか

なぜ、わたしは文を書くのか、しかもひとに伝わらない小難しい文を書いているのか？これについては折々に書いてきたのですが、このことさえ、きちんと伝わっていないというのを改めて感じて来ていて、また書き置きたいところに文にします。

わたしは差別ということ、しかも自分が受けた差別の中で、それが差別総体、差別の構造の中でおきていることであり、そのことをなくしたいという運動をやってきました。そこで、運動のための理論が必要になり、その運動のための理論を広げ、深めるために文を書いています。運動のための理論であり、そこで理論化に必要な文を読み、そして文を書いています。

文を書くことが好きなひとがいます。それは自己表出活動的な意味もあるでしょうし、探求心で研究をし、そのことを文にして、評価をうける、共鳴を引き出す、そのことがうれしい楽しいこととして文を書いているひとがいます。学者といわれるひとたちです。その中でも、研究を続けていく大学の教員であるために、学位をえる、職をえる、職を維持するために論文を発表し（続け）なければならないというところも出てくるかもしれませんが、基本的に探求心や、その職が自己表現的な活動になっています。また、そもそも、自己表出活動として文を書いているひとがいます。小説とか、エッセーとか、詩とか、・・・それは音楽とか、美術とか言われるようなことにつながっています。

さて、運動も自己表出的意味はもっています。しかし、運動が行き詰まる中で運動を続けるひとの中には、それを自己表出的活動にしてしまっているひとも出てきます。わたし個人の基準では区別しています。運動を回す、進めるということが必要なものであって、そこで自分が何をやるのかという必要な役割を担うこととしてとらえることであり、自己表出はどうでもいいことなのです。それが運動だとも思っています。そして、問題の解決のための活動としての運動の中で、その運動ということよりも自己表出を優先させると混乱が生じてきます。そのような場面になんどもでくわせてきました。ですから、わたしは文を書くのはあくまでも運動のための理論的深化のためと、繰り返し自戒的にとらえ返して作業しています。

さて、わたしは運動の中で、「事務屋」をもって任じていました。別に自己卑下的に言っているわけではありません。「事務屋」というのは、その運動の内部で確実に必要な役割で、内部的にははっきりと役に立つ役割なのです。で、運動の「理論家」も必要なのですが、わたしが最初に担った、教育学園闘争の中で、当時は「書を捨てて街に出よう」的な実践が求められていた時代で「理論家」は「偉大なイデオログ」と揶揄されていました。実は、「事務屋」も「事務屋などにはなるな」と批判されていました。それは、何かやっている気になる自己満足的活動に陥りがちです。そもそもリーダーシップをとるひとがいて、理論的な提起をするひとがいて、初めてなりたつ活動で、運動が回らなくなったら、意味がない、そもそも活動自体がなくなる活動なのです。ですから、「そして誰もいなくなった」という状況や、「ここで発言しなければ運動がないものにされる」というところでは、「事務屋」でいられるわけではなく、何でもすべての役割を担っていく事になっていきました。

それでも、「事務屋」志向はわたしの中に強くあり、特に当事者性があることで、当事者を支える活動では「事務屋」のポジションが心落ち着くところだったのです。たとえば、コミュニケーション障害の共通性というところからかかわっていた「聴覚障害者運動」で、裁判報告などの事務的な仕事を担いつつ、交渉の場面でひとがいないところで手話通訳もいない、発言も必要とされるときがありました。で、当事者できちんと提起をしてくれるひとがいて、それなりに通訳に徹せられる、「事務屋」に徹することができるのが一番運動が回っているで、やりがいがある活動だったのです。

ですから、そもそもわたしは好きで文を書いているのではなく、むしろ誰も書くひとがいないから、「ねばならない」的のところまで文を書いていたんです。将来的には「ねばならない」とところから解放されたところで文を書きたいという思いは持ち続けているのですが、一体そんなときは来るのだろうかという思いは持っています。そういうときはむしろ論理的な文ではなく、そして文でさえなく、別の媒体を使って自己表出活動をするときなのかも知れませんが・・・。

さて、もうひとつの「小難しい文をなぜ書いているのか」という話です。

わたしが軸にしているのは「障害者運動」で、そこでのわたしの当事者運動は「吃音者運動」なのですが、そこでは「吃音者は障害者なのか」というところでもつまづいていました。だから、「そもそも障害とはなにか」という議論からはじめなければならなかったのです。結局、「吃音者」においては、「吃音を治す・軽くする」という思いに総体的にとらわれているところで運動として定立しないと、外に飛び出したのです。

以前「障害学研究会」のメーリングリストで、障害を巡る議論をしていたときに「一種・一級」という「障害者」から批判をうけたことがあります。その「障害者」にとって、「自分は紛れもない障害者だ」という意識からの批判だったのだととらえ返していました。「障害者」であることが、あいまいな存在があります。マージナル・パーソン（マージナルは「周辺・周縁とか、境界」と訳されます）としてとらえられる「障害者」も差別というところにとらえれば、受ける差別の形が違うだけで、まさに「障害者」なのですが、「障害者」として主体化（「自己」定立）しにくい存在なのです。

で、「一種・一級」という公的な規定をされる「障害者」、とりわけ「障害者」ともいふべき「脳性マヒの障害者」にとって、「わたしが障害者だ」として、「障害とは何か」という議論など必要でなかったのかもしれない。ただ、まだ遅れてきた人権・差別問題であったところで、「かわいそうなひと」としてとらえられていたときには、「脳性マヒ者」の団体である「青い芝の会」は、まさに「障害とは何か」ということも含めて議論をしていました。

今日、人権という考えがそれなりにひろがり、それなりに福祉が進んでいる中で、そのような議論の必要性も感じられなくなっているのかもしれない。ですが、そもそも人権ということがそれなりに社会に定着していけば、差別がなくなるのかという問題があります。もし、そうであれば簡単な話で、小難しい話など必要ないのです。しかし、現実を見ていると人権ということで差別がなくなる方向に進んでいるとはとらえられません。どうも、本音と建て前というように分離しているようなのです。ポイントは、人権ということ

の中に「能力による差別もゆるされない」という考えが含まれないということです。今の社会、一般的に資本主義社会としてとらえられています、差別が「能力による差別」として転化・収束され、「能力による区別は差別ではない」と正当化されていくのです。

現実にはゼロから競争するわけでない、実は能力主義で徹底されている訳でもないのですが、家族に財産がひきつがれる私有財産制において、家族の能力によって過去に蓄積された財も引き継がれるとして正当化されます。逆に私有財産性を維持・再生産するために家意識を再生産するためにジェンダー（性役割・分業）なることが生み出され、再生産されます。そしてあらゆる差別が体制—差別の構造を維持・再生産されるために維持・再生産されていきます。いろいろな「科学」・イデオロギーを駆使して。

人権論者の中には、能力における差別も問題にしようという提起も出ています。また「能力は個人が持つ物とは考えない」というような提起も出ています。こういうところで人権論が機能していくのでしょうか。「能力を個人が持つ物とは考えない」ということは、そもそも近代国家・資本主義の論理を否定することです。そもそも近代的個我の論理の中での私的所有の論理を否定することです。知や情報の蓄積は歴史的社会的協働のなかでなされてきたことで、ひとは一から研究を始めるわけではないのです。過去の蓄積された知識をとりこみ、そこにみずからの新しいことをほんの少しつみあげ、まさにそれが知の財産—ひと総体の「能力」として共有化されることではないでしょうか。実は「もつ」（英語で with）ということばがどのように機能しているかの問題があります。実体—属性という近代知の地平が、所有の論理を成り立たせているのです。

人権論が近代知の地平を脱して、新しい社会の思想となりえるのでしょうか？ わたしは人権という概念は、差別のない関係の物象化として押さえています。別の言い方をすると、差別のないことに賛成するひとたちが作りあげた法・制度まで昇華させた取り決めのようなことです。問題は人権は資本主義国家で多くは国是になっているのですが、「能力による区別は差別ではない」というところで、差別を容認するシステムになっていることです。このシステムを壊さない限り差別はなくなりません。人権やそれを政策化していく福祉が、逆に差別にふたをする（とらえなくさせる）役割を果たしてしまいます。近代国家において国家という共同幻想を成立させるために（なぜ、国家という枠組みでかんがえてしまうのでしょうか）、福祉やそのもとになる人権思想が必要になったのです。もちろん、人権思想が反差別ということで果たした役割ということはある、武器でもあったのですが、これは架空の話です。そもそも人権は天賦人権というキリスト教思想とあいまって登場してきたのですが、神ということがそもそも否定されたら、架空のはなしにしかありません。架空のことで法制度化されたら、それなりに実態化されるのですが、問題なのは、その人権ということを否定する論理も一方では科学として広く流布していて、その批判をなしきれていないのです。そういう中で、本音と建て前の分離的になってしまっているのです。だから、差別者にとっては、本音を言ったら批判される、地位を失うから、本音と建て前を使い分けようとなっているのです。ときどき本音を出して、マスコミで叩かれ謝罪をするということがくりかえされているのですが、むしろ、その本音のところをきちんと批判して行かなくてはならないのですが、そこまでやる必要はないとして、人権派もふたをし

その本音のところを近代思想・近代知というところから押さえて、批判していく必要があります。そのことをとらえ返し、近代知のパラダイム（「考え方の枠組み」）としてとらえ、それを哲学思想の歴史からとらえ返し、「哲学の意義はパラダイム転換にある」として、近代知批判の作業をしていたひとがいます。わたしが繰り返し引いている廣松渉というひとです。小難しいどころではなく、大難しいとして、ほとんど対象化されていません。実は学習ということにはどのような学習でも壁があって、その壁を越えたら、逆にかえって分かりやすくなるのですが。

パラダイム転換の話をもう少し書いておくと、そもそもこの話はクーンが持ち出したことばです。コペルニクスがそれまでの天動説を批判し地動説に置き換えようとした、その転換にはそれまでのキリスト教的知の枠組みから、新しい知の枠組みで転換することが必要だったし、そのことはキリスト教の思想的枠組みにいたひとには当初意味不明の提言であったという話があったのです。小難しいところではない、とても理解しがたいことだったのです。だから、そもそもこの時代の支配的思想を覆す思想が、簡単にとらえられるわけではないのです。だから小難しいととらえられるのは、まだましなことなのです。勿論、わたしの文章力のなさとか、そもそもきちんと対話する姿勢の弱さとかの解決すべきところでのわかりにくさは自己批判しつつ、改めて行かなければいけないのですが。もうひとつ、わたしがとりあえず、わたしの中で理論的深化を目指していて、自己ノートのメモ的なことを書き記していて、そこから脱していないこともあるのです。少しずつ広げることに重点をうつしていくことですが、広げるにあたっては、「文の論理性において能力をみがく」ようなことにつなげていくよりは、むしろ表現媒体を変えるとか、協働作業を見出していく方が良いのではとも思っています。

もうひとつ、誤解を受けていそうなので、書き置きますが、わたしは理論化の作業をしています、「理論で社会を変えよう」と思っている訳ではないのです。わたしは「ゲゼルシャフト（目先の利害を追い求める社会）では、ひとは理論や理念で動くものではない、ひとは利害を巡って動く」ということを、唯物史観の定式として押さえています。だから、そのあたりは批判の論理性を高めていくということよりも、利害の問題を整理し、利害の問題として感性的にとらえられるように突き出していく必要があるのではとも思っています。そのあたりは主に「通信」の巻頭言の文章でやっていることです。ただ、「科学的」ということで、ごまかしの政治がなされることにはきちんと批判していくためには「科学」批判が必要だというところで、理論文も書いています。これは『『反障害原論』への補説的断章』を軸にやっていきます。

原発の問題や、集団的自衛権や、武器の輸出や戦争や飢餓がもろもろの政治が目先の利害を追うことから来ていて、その破綻がとらえられてきている、それをウソとごまかしと無責任の体制でやりきろうとしているそのことを暴くことがまず必要です。そして、目先の利害自体を追うことがどうなっていくのかがとらえられるようになってきている、また目先の利害自体でも、うそになってきているということ、まず、広く訴え、またうそで隠蔽していくことに「科学」が果たしている役割を押さえ、「科学」批判も含めた批判が必要になっているのだと思います。

(編集後記)

◆巻頭言は同じような文をすでに出しているのですが、まとめる意味で出しました。なんで、こんな明白なうそやごまかしや無責任がまかり通るのか、きちんと批判して、こんな政治を打ち破る行動に移していきたいと思います。できることから少しずつ。

◆政治ということがそもそも差別的なのではないかと思い始めました。そもそも「民主主義」といいますが、多数決で決する議会主義の政治は「意見の押し付け合い」という意味で、そこにそもそも差別があるのではないかと。昔、差別関係の本を漁るように読んでいたときに、高杉晋吾さんが、武力闘争をする新左翼の党派は反差別の立場に立ち得ないのでは、とか書いているのを目にしました。しかし、「戦争とは別の手段をもってする政治である」という同じような意味において、そもそも政治が差別的なのだと言わざるをえません。ですから、反差別の政治が必要だとしたら、それは政治を否定する政治なのだと考えたりしています。

◆読書メモは、読んだ本も介助関係の本が多いのですが、今、介護の講習会に通っていて介護のテキストを読んでいるので、予定していた読書が進んでいません。テキストの読書メモも書くことなのですが、何かおかしいことが多々。どうも、多くの著者の合作なのですが、あちこちで矛盾をきたしています。また障害問題で議論されていることが「高齢者介護」に届いていないようなのです。これに関しては後にまとめます。

◆『驚きの介護民俗学』については2014.7.24朝日新聞で著者がインタビューを受けていました。障害学の色んな本が出ています。色んな論者がいるのですが、対話がかみあわず、全然論考が進んでいません。まとめ直す必要があるのですが、わたしの提起が全然届いていないのをどうにかしなくてはと思っています。

◆「介助日記」はタイトル自体を変えようかと思っています。母の介助の反省をそれなりにまとめて文に残す作業をぼつぼつ始めるのですが、その本にする予定の文にはむずかしいことは書かないと決めているので、論理的指向を求めるひとたちのための文を、この欄でやっっていこうかと思っています。

◆今回の「断章」は何人かのひとたちと色んな場面での対話の続きです。わたしはきちんとした学をする訓練を受けていません。本との対話、運動関係で出会ったひととの対話の中で、論考を進めています。それは弱みでもありますが、むしろ強みにもなると思ったりしています。

◆「川柳」はお休みしました。型にはめるのがつらくなってきているので、別の形に転じるかもしれません。

反障害－反差別研究会

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>